

随流去

石井 裕

夏の一日、懇意にしている世田谷の禅寺を訪ねた時のことです。

客殿の床に「随流去」の三字の茶掛け一幅が懸けられてありました。「流れに随って去る」と読めます。静かに、しかもつつましく、真剣に、ただ、ひたすらに書いた。と、いうような書です。茶を喫しながら床の書を娛しく拝見したのです。

その書には署名もなく何の変哲もありません。今時の展覧会に出品したら、やっと入選するかと思われるようなものです。しかし、見ているうちに落着いてお茶を飲みたくなるように思えるから不思議です。

これを書いたお方はお茶を嗜んでいた人かとも思われます。この語句は茶席によく似合

うことばからかもしれません。

そこで、しばらくして寺の奥さんに尋ねてみました。

「これは何とも落着いて書かれていますけど、あなたが書きになったのですか。」

「この方は檀家のお一人で未亡人の方です。」とのこと。

話は続きます。これをお書きになった未亡人のご主人が長い闘病の末他界されたとのこと。未亡人は永いことよく看護され、ご主人の臨終を看とられたとのこと。話は更に続きます。そこでご主人の冥福の願いをこめて、この寺に寄進されたとのことでした。

未亡人としては万感をこめて、この茶掛一幅をしたためたのでしよう。

文芸学会・卒業生の会

井上英明先生をお迎えして

平成三年九月十五日(日) 神奈川県立神奈川近代文学館に於て第四回文芸学会・卒業生の会が開催されました。

今回は昭和四十年代に文芸科に在職されていた井上英明先生(現在明星大学教授)に、『英国人の個性』と題して講演していただきました。ロンドン大学で七年間教壇に立たれた井上先生は、英国でのご生活をもとに、日本人との違いや共通点を様々な角度から話して下さいました。日常の面白いエピソードを豊富に交えたお話でしたので、とても親近感がもてました。

講演会終了後の懇親会は、同文学館の別室にて昼食をとりながら行われました。先生方の内輪話や旧校舎時代の出来事等、ま



ですから、気負いもなく、ひたすらに一途に筆を執ったのでしよう。

流れに随って去る―この語句は未亡人ととって心からそういう心境になれた「ことば」であったのではないでしようか。

ですから、この茶掛一幅には未亡人の切なる思いが感じられる書となつて私をとらえたのだと思います。

それから、話が更に続きます。この茶掛を寺に寄贈されてから一年後、その未亡人も夫の後を追うようにして世を去られたとのことです。

流れに随って去る―まことに不思議な因縁めいたことを感じさせられる茶掛けです。

時に未亡人は四十代半ばを過ぎた年齢であつたとのことです。

未亡人も流れに随つてこの世を去られたのでしようか。

思えば一人一人この世に生まれ、いろいろな生き方をしながら終にはその生を終る。

この夏の一日、禅堂で観た一幅の茶掛けは私にいろいろ人生について考えさせる機縁を与えてくれたように思われます。

話を交えて、書を書く立場からこの茶掛一

幅を観ると、書を書くということはどういうことなのかを深く考えさせられます。

前に述べたように、この書は展覧会で入賞し脚光を浴びるようなものではありません。

しかし、落着いて眺められ、一服のお茶をおいしくいただけるのはどうしてでしようか。

これは、結局書いた方の心が素直に観る人に伝わってくるからではないのでしようか。

わたくしは、書を習いだしてから五十年を経ようとしています。古今の名品はつとめてその原本に接することにつとめてきました。

名品といわれるものには、筆に無理がありません。自然です。筆者の心持が豊かに表現されています。

無理なく、自然で暢びやかに、こせこせせず、ゆつたりと流れに随う心境で筆を執ることができたなら、少しは楽しんで観られるような書がかかるのかと思われます。

卒業生からは近況や在学中の感想等を伺いながら、和気藹々と楽しい時間を過ごしました。

現在文芸科に在職中の先生方、また以前所屬していらした先生方も本当に多数お出下さいませ。

平成四年度第五回は、旗の台校舎周辺での開催を考えております。文芸学会卒業生の会発足五周年を記念して、和やか且つ盛大に執り行ないたいと思ひますので、お誘ひ合わせの上、ぜひお出掛け下さい。

〔昭和六十三年卒業 増森 智子〕

平成三年九月十五日（日・敬老の日）

〔講演会〕

神奈川県立近代文学館二階 企画展示室

午前十一時～午後十二時

「英国人の個性」について

明星大学教授 井上英明先生

司会 山下亨子

〔懇親会〕

同 会議室 午後一時～午後三時

司会 中里江里